二五　椎地四郎殿御書

先日御物語の事について、彼人の方へ相尋候し處、仰候しが如く少もちがはず候き。これにつけても、いよいよはげまして法華經の功德を得給へし。師曠が耳、離婁が眼のやうに聞見させ給へ。末法には法華經の行者必ず出來すべし。但大難來りなば强盛の信心彌彌悅をなすべし。火に薪をくわへんにさかんなる事なかるべしや。大海へ衆流入る、されども大海は河の水を返す事ありや。法華大海の行者に諸河の水大難の如く入れども、かへす事、とがむる事なし。諸河の水入る事なくば大海あるべからず。大難なくば法華經の行者にはあらじ。❶天台云、衆流入海薪熾於火等云云。法華經の法門を一文一句なりとも人にかたらんは、過去の宿緣ふかしとおぼしめすべし。經云、亦不聞正法如是人難度云云。此文の意は正法とは法華經也。此經をきかざる人は度しがたしと云文なり。法師品には若是善男子善女人乃至則如來使と說せ給て、僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如來の使と見えたり。貴邊すでに俗也、善男子の人なるべし。此經を一文一句なりとも聽聞して神にそめん人は、生死の

❶【系年】弘長元年四月廿八日 (40) 於鎌倉　【寫】朝師本　【刊】外2_{44} 遺 7_{31} 縮 410　【註】考 2_{21} 微上 9

❶にはあらじ＝カタシ(朝)